

挨拶

吉川先生：

吉川でございます。共催者のひとりとして一言ご挨拶を申し上げます。アジア研究圏創設という大変なチャレンジングな しかしある意味では、当然ということをして今日議論されるということで、心から私も喜んでおります。現在、よく言われるように、新しい時代、即ち開発の時代から持続性の時代へと展開している中で、私は、イノベーションが大事だということをよく言っています。そして、各国政府もイノベーションが必要であると言っています。イノベーションとは何かと言えば、当然それは、変化です。社会活動全般に及ぶあらゆる部署で変化が起こっていく。変化することによって活性化する、これがイノベーションの原理だということです。しかしながら、ただ変わればいいという時代は、すでに終わってしまった。いま申し上げたように、持続性という問題に人々の活動が、あるいはいろんな組織の活動が、世界全体がそちらに向かうという形での変化というものを遂げなければならない。そのためのイノベーションだということです。現代のイノベーションというのは、持続性に向かって世界全体が移動していくためのイノベーションだと考えられるわけです。持続性の問題というのは、よく言われるように地球温暖化問題であったり、生物多様性問題だったり、あるいは、物質の地球内でのサーキュレーションだったりするわけですが、こういった物質移動が人間活動によっていろいろ変わってきてしまい、生態系というものに影響を与えています。こういう問題は、謂わば、持続性問題です。現在のイノベーションとは、地球が長持ちするような形でいろいろな人間活動を変えていくことだと思えます。そのためには、さまざまな問題が、変化しなければならない、企業も変わり、研究も変わり、教育も変わり、恐らく人々の生活も変わる。そこで 問題になっているのは、変わることは、コストがかかるということです。私は、変化のコストと呼んでいます、その変化のコストというのは、場合によっては大変大きくなってしまいます。例えば、既存の企業が伝統的な製品を作っている中に新しいベンチャー企業が成長してくると、産業の構造が変わることになります。その変わり方が、例えば、そのベンチャーと大企業とが非常に争って、両方が生き残るために、激しい争いを繰り返すようであれば、変化のコストとしてはかかりすぎることになります。かといって、全面的に受け入れて敗退すればいいという問題ではない。ある種の競争と、協調が上手にバランスとった時に社会が変わっていくための変化のコストというのを、再評価することができる。

残念なことに、その変化のコストについての理論というものはない。ひとつ思い出すが、実は、1980年代に始めた国際共同研究というのがございまして、これは、インテリジェントマニュファクチャリング(IMS)と通称されて、20年後の現在も、まだ世界で通じている製造技術に関するものでした。80年代に製造業で協力しようと私どもが提案した時に、製造業とは、協調するものではなくて、競争するものだ、製造業で協調するなんて、それは一種の社会主義だというように言われまして、非常に猛反対を受け

ました。しかし、実はそうじゃない。競争しながら、次第にいろいろ展開していく中で、非常に基本的なところでは、協調が必要なのです。例えば、製造業といっても競争企業は、みんな同じこと、例えば、ニュートン力学はみんな同じように知っているわけですね。したがって共有すべき知識というのは、協調して作っていくということが非常に大事なので、競争はその上に乗っかっていけばいいわけです。しかし、その競争の部分が重すぎるとこれは変化のコストが上がってくる。そういったことで、産業も、研究も、科学技術研究も、謂わば、その協調というものをどうやって取り込むことができるかということが、開発の時代から、持続性の時代になる時の、世界的なコストを下げる時の大きな課題になると思っています。

そういう中で、EUはEUで、アメリカ地区ではアメリカで、ひとつの研究圏というようなものが次第に成立しはじめたのは、もちろん域内の競争はあるものの、地域研究圏という形で、非常に大きな協力関係を意識的に作ろうという大きな流れであると思われる。地域研究圏というのは、謂わば、人類が持っているその変化、しなければならぬ変化のコストを下げるのに、非常に有効な手段だということであろうかと思えます。そういう中で、今回ご提案のアジアにおける研究圏創設ということは、ただ単に研究を良くしようという話ではなくて、人類が、ある意味では、生き延びるための必須の条件として、その変化のコストをミニマイズすることで地球の負担を下げて、そして同時に人の豊かさを守るという方程式の一つの非常に重要な解であるというふうに考えられるわけで、これを具体的にするとということが緊急の課題であると思っています。この、私の期待とそれからアジア研究圏構想を計画された方への一種の賞賛を申し上げて、私のご挨拶に替えさせていただきます。すばらしいシンポジウムなることを期待いたします。ありがとうございました。